

---

# PK使いと魔法使い

ミカンガム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

PK使いと魔法使い

### 【Nコード】

N0115BA

### 【作者名】

ミカンガム

### 【あらすじ】

最初に念動力を使ったのは一歳。念動力を使う事が楽しいと思っ  
たのは五歳。念動力は便利だと思ったのは十歳。全日本超能力大会  
で一位になったのが十七歳。そして、つまらない世界にさよならし  
たのも十七歳。

思い立ったが吉日、は良い言葉だと思っ

「神宮智人は全日本超能力大会にて優秀な成績を収めたのでこれを賞す」

ああ、そんな名前の大会だったっけ？ ぼんやりとした頭を働かせながら神宮智人は目の前で偉そうにふんぞり返る薄ら八ゲを見つめていた。

「おめでとう。数千人を超える参加者の中で一番になるのは容易ではなかったと思う。きつと努力を重ねてきたのだろう」

「はい。それはもう必死に」

真つ赤な嘘を堂々と述べながら、自分の右の手のひらを見つめる。この右手には、いやこの体には兵器なんかよりもよっぽど恐ろしいモノが宿っているらしい。

そのモノは、神宮に念動力の力を与えていた。

「そうだろう。皆超能力の種を持っていると言うが、それを昇華させるのは大変らしいな」

種、つまり才能。

何十年前からかは覚えていないが、人類に劇的な変化が起きた。

それは超能力の出現

すでに生まれていた者には一切宿らなかつたが、新生児にその現象は顕著に現れた。

物を浮かばせるサイキネシスもあれば、発火能力のパイロキネシスもあつた。

当時相当な議論があつたが、様子見という意見が大多数を占めていた。

そりゃあ危険因子はすべからず排除すべきだという意見もあつた。

だが世界中の新生児ほとんどにこの現象が見られたので、生まれてくる新生児を処分していつでも人類は滅びるという当然のことに気付き、様子見なわけだ。

だが、超能力者の親はどう受け止めるか？

すごい！ 名誉なことだ！ とプラス思考で受け取るか。

……気持ち悪い、とマイナス思考で受け取るか。

大半は前者だった。

しかし、後者の反応も確かにあった。

自分からは超能力者は生まれないと信じ、子供を産み、絶望する。

そして気持ちの悪い子供は棄てられる。

神宮の両親は、後者の反応を取った。

しかし神宮はどうとも思っていない。

神宮という名前は自分が考えた名字だし、親の顔は見たことすら

無い。

だが今こうしてぴんぴんしている。

詰まるところ別に親などいなくても、問題は無かったのだ。

「君は、サイコキネシスを使えるんだったな。今見せてはくれんか

ね

「まあいいですよ」

まず辺りを見渡す。

人々人々、人しかない。

まあ日本初の超能力大会の表彰式なので注目がない方がおかしい

とも言える。

「何か浮かばせられる物があれば良いんですけど」

あ、あるじゃないか。

今目の前にわかりやすい物が。

やる事が決めれば後は簡単だった。

まずイメージ。

頭の仮想ギアを一気に回転させて何かの力を発生させる。

そしてその力を作用させたい物質に向けて放出する。

これが神宮の超能力のイメージだった。

「……確かに、これはすごいな」

驚く薄らハゲの目の前で、賞状がびらびらと浮かんでいた。

手で支えているのではなく、サイコキネシスでだ。

「すごいって言うより便利って言葉の方がぴんと来ます。勝手に掃除はしてくれるし、洗濯もしてくれる。雑用係ですよ、俺のサイコキネシスは」 「ぎ、雑用か」

薄らハゲは苦笑いを浮かべた。

この大会の趣旨は『日本で一番強い超能力者を選出して、世界大会に推す』というものだった。

だが、一番強い超能力者が超能力の事を雑用係扱いしている。闘争心に欠ける奴だな、と薄らハゲは思う。

「ま、そういう点ではサイコキネシスが最高ですよ。パイロキネシスなんて生活のどこで使うんだか」

決勝戦は笑いを堪えることで必死だったことを思い出した。

予選の集団戦を勝ち抜いて、本戦の個人戦。

その決勝戦で神宮は、パイロキネシスの使い手と当たった。

別にここまではおもしろくない。

パイロキネシスの能力者は予選でも本戦でもくさるほど見たからだ。

おもしろかったのは、そいつが放った台詞。

正直言って、舌戦をしにきたのか、とさえ思った。

そして、その台詞とは『サイコキネシスがパイロキネシスに敵うわけがないだろ！』だ。なぜそうなった？

なぜサイコキネシスがパイロキネシスよりも弱いと決まってるんだ？

そのわけがわからない自信に対して、神宮は心の中で大爆笑をしていた。

大爆笑しながらもサイコキネシスを行使してあっさり気絶させたが。

「だいたいパイロキネシスって火をおこすだけじゃないですか。危ないったら、ありゃ？」 おかしい。

薄らハゲがかなり取り乱している。

見つめる先は神宮の背後。

今の台詞に驚かせるような要素は全くない。

つまり驚きの理由は神宮の台詞以外にある。

「ああ。そういうことか」

薄らハゲの驚きには、自分の身が危ないという気持ちも含まれている。

それだけで、何が起きているのか察することが出来た。

「しつこいなっ！」

振り向く。

そしてギアを、回す。

たったのツーステップ。

そのたったのツーステップで、直径１メートルの火の玉が止まった。

薄らハゲはほっとした雰囲気を含み隠さず表情に表している。

「これじゃあ殺せないぞ」

ギョツと右の手のひらを握りしめると、火の玉はパンツと風船が割れるようにして消え去った。

何が起こったのか簡単に記すと、襲撃があったからそれを退けた、それだけである。

単純だが悪意がみつちり詰まった行動だ。

「……あそこか。やっぱり自信くんだったな」

神宮の視線の先には、慌てふためいている決勝戦で戦った相手が見えた。

パイロキネシスのことをコケにした神宮に腹が立ったのだろう。

しかしあっさりと奇襲を退けられてかなり動揺しているようだ。

みつともなく走ってドームの出口の方へ向かっているのが遠目でも確認できる。

「追いかけた方が、いいか？」

競技以外で超能力を使い人を傷つける、または傷つけようとした場合は犯罪行為になるので警備員が追走を始めた。

しかし観客はおもしろがって見ているだけだ。  
自分の身に起こっていることでなければおもしろいことなのだろう。

「……追いかけるか。警備員じゃ何も出来ないだろうし」  
見たところ警備員は四十代くらいの男性だったので、超能力世代ではないはずだ。

そうだとすると反撃にあって無用の怪我を負ってしまうかもしれない。

「あ、そう言えば新技あったんだよなあ」

かなり前から考えていた新しい力の使い方。

しかし、何となくその使い方をするのは躊躇われた。

「まっ、いつか。成功したらあいつのすぐ前に出られるだろうし、失敗しても、死ぬだけだからな」

そう呟いてから右手をドームの天井に掲げる。

そして、振り下ろした。

右手が完全に振り下ろされるのと同時に、神宮の目の前の空間にヒビが入る。

そのヒビは大きくなっていき、神宮の体と同等サイズになるまで空間を割り続けた。

割れた先は、真っ暗で何も見えない。

「な、なんだこれは！」

最初に反応したのは薄ら八ゲ。

「次元の裂け目です。たぶんここをくぐると、俺が思い浮かべた場所に出られると思います。今回は火の玉を撃ってきた奴の目の前に出たいなあ。走らなくて済むし」

「そ、それはテレポーターのことか？」

世の中にはかなりレアだがテレポーターも存在する。

神宮的にサイコキネシスの能力以外だったらこの能力が良かった  
と思っっている。

「まあそう考えてもいいですよ。ただ、こんな使い方はしたことが

ないので、成功するかはわかりませんが」

言いながらも神宮は裂け目の中に入ろうとする。

だが薄らハゲの話はまだ終わっていないようだった。

「し、失敗したら死ぬと言うことだろう！ 何もそんな事せずとも、あの男は」

捕まる、と言いたいのだろう。そして神宮を世界大会に出場させ日本の選手が優秀であるということを知らしめたいのだろう。

「いいじゃないですか。もし俺が帰ってこなかったら、あの男を世界大会に出せば問題は無いです。パイロキネシスを使えばPK使いも簡単になぎ倒せるはずです。あいつマジ強かった。ええマジで」

「し、しかしっ！」

まだ何か喋るつもりのようなうだ。

だがもう、聞く気はない。

「あー、足が滑ったー」

と、わざとらしく声を上げて裂け目に身を投げる。

瞬間的に、目の前が真っ暗になった。

音も聞こえないし何も見えない。落下しているのか制止しているのかさえもわからない。

「ただ、いいや。」

死んだら死んだとき、別に生きてても寝てることくらいしか楽しいことはなかった。

「だったら死んでいても同じじゃないか。」

なら二酸化炭素も出さないし食料もいらさないから死んだ状態の方がお得じゃないか？

「あー、それは盲点だった」

そんな絶望感百パーセントの台詞を言い終わると、光が見えた。扉のような形で、ここへおいで、と言っているように思える。

「お招きになっちゃあ、行くしかないよな」

そう考えたが最後、扉から滲み出るようにして光が伸びてきた。そしてその光は神宮を優しく包み込んだ。



「この光で、布団作りたいなあ」

そんな出来もしない願望を頭に描きながら、光に身をゆだねる。  
目覚めたとき、自分はどくなっているのか。

自信男の目の前に出るか、それともここで眠り続けるのか。

できれば……………後者が良いなあ。

思い立ったが吉日、は良い言葉だと思つ（後書き）

というわけで始まります。ただ他の作品も書いているので投稿は遅くなるかもしれない。

何かお気づきのことなどあれば教えてくれれば幸いです。感想も、一応待っています。

百聞は一見にしかずとはよく言ったものだ

結論を述べるなら、自信男の前に出ることは出来なかった。

だが、死んだわけでもない。

右手にはまだ生の実感がある。

生きているなら考えなければいけない。

今どういう状況に置かれていて、何をすればいいのかを。

「ここは、どこだ？」

まず目に入ったのがレンガ造りの家々。

西洋の町はおるか、外国にすら行ったこともないがたぶん西洋はこんな感じだと思う。

「それと、人か」

神宮は路地裏みたいな所にいるようで、細い道の先にはたくさん歩く人々が見えた。

その細い道を抜ければ大通りにでも出られるのだろう。

どうやら夕方のように、辺りが暗く歩く人々の顔などは正確に見ることが出来ない。

「行くか？ いや、まだ考えろ」

テレポートもどきを使って、この路地裏のような場所に出てしまった。

あの穴は神宮の意志の集合体で、神宮の思った場所に転移できるようにと設定していた。

出てきてみれば全く思っても見なかった場所へ。

とりあえず、テレポートもどきは失敗したと言うことになるのだろうか。

「……失敗、か。じゃあここはどこなんだろうな」

目を閉じて思考をフル回転させる。

レンガの家に囲まれているという状況から、ヨーロッパのどこかか？

ヨーロッパのレンガ造りの家は古い物ばかりだと聞くだけ聞いたこともある。

「まっ、人に会えば何かわかるだろう」

そう楽観的に考えて、おそらく大通りに繋がっているであろう道を歩く。

そこまで長くなかったので、大通りに出るのはすぐだった。

「……さっそく判断要素が増えたな」

大通りではたくさんの人が闊歩していて、ぼうっと突っ立っているのは危なそうだ。

迷惑を掛けるのはいけないと思い、邪魔にならないような所に移動した。

道行く人の快適度が維持されたのを確認してから、再び思考。

ぼっぽとおかしな点が頭に浮上した。

着用している服がおかしい。

喋っている言語がおかしい。

以上、二点の判断要素を加えると、自然とここがどこなのかわかった。

「異世界か。まあ……すごいよなあ」  
まず服。

茶色や白、黒などの地味な色の生地を主体としていて、ファッションとは無縁そうな安っぽい衣類。

ヨーロッパの人達ももつとマシな物を着ているだろう。

ただ、神宮も似たような地味目の服を着ていたので注目されることはなかった。

ちなみに神宮は日本大会にも普段着で参加した。

相手が戦闘不能になるまで戦闘を行うというハードな勝負をする  
とわかっていたはずなのだが、気張らなかつた辺り大物というのか。  
それから二つ目の要素である言語。

お店で買い物をしている人や、道行く人々は訳のわからない言語を喋っている。

「俺が知らないってことはないだろうな」

超能力の作用なのかはわからないが、神宮の脳はかなり発達しており、地球に存在した言語は隅から隅までマスターすることが出来た。

だから、聞いたことのない言語があるのはおかしい。

「さて、この後どう動くべきかな」

本人の中ではここは異世界に決定したらしい。

まあ状況証拠が溢れんばかりにあるのだから仕方ないかもしれない。

「危ない人はいなさそうだな」

そのことだけわかればもうどうでもいい。

いや、危ない奴がいたところで、どうとでもなる。

「貨幣制度あり、食べ物も何とか大丈夫そうだ」

もつと深く状況を知るために大通りの中心を歩くことにする。

大通りには数多くの露店があり、取引もスムーズに行っているよ  
うなので貨幣制度がある事が推測できる。

それに何かを食べながら歩いてる人もいるので、神宮自身が餓死  
するという可能性も薄くなった。

最悪野にでも繰り出して動物や木の实などを食べれば問題はあ  
るまい。

「ただ、言語がわからないのは困る」

言語が喋れないと不便なのは火を見るよりも明らか。

教えてもらえばすぐに習得できるのだろうが、教えてくれとも  
言えないのでそれは難しい。

「身振り手振りでいけば何とかなるか」

またまた楽観論である。

地球の身振り手振りがここで通用するのかどうかなど考えず道  
なりに歩き続ける。

やがて、大きな広場のような場所に出た。

「何かやってるっぽい」

広場の中心には人だかりができていて、何かを囲んでいるように見える。

「おっ、手品か何かか」

群衆が「おおー」と感心したような声を上げたので、それで九割九分間違いは無いはずだ。

「ちよつと見てみるか」

言語が通じなくとも手品は視覚的に楽しませるショーなので見ればわかるはずだ。

そう考えながら群衆に近づいて行くと、またもや「おおー」と声上がる。

人の壁のせいでさつきは何をしているのかわからなかったが、今回は神宮も何をしているのかわかった。

群衆の中心から、激しい火柱が上がったのを視認したからだ。

皆感心しながら見ているということは、事故ではない。

「……すごいな」

パイロキネシスを使えば容易ではあるが、地球の『手品』ではこんな事出来なかったはずだ。

だから素直に感心しているわけである。

「何してるんだろ」

それを知るために人混みをかき分け、群衆の中心まで向かう。

なかなかの密度だったが、何とか辿り着くことが出来た。

「kijunciylnsxu;oszmretci」

「……ダメだ。さっぱりわからん」

手品をしているであろう人物が、みんなに向かって何かを言っている。

みんなそれに答えているのか何か叫んでいるが、神宮は全く理解できない。

やがて群衆の答えに満足したのか、手品師はニコツと笑って左手の人差し指をピンと立てた。

そして、右手には、杖。

「……………」  
杖と言っても体を支えるための杖ではなくて、創作の魔法使いな  
んかが持っていていそうな短いアレだ。

「iscntiasmxuas」  
手品師が何かを吹きながら杖を振ると、ピンと立てた人差し指  
の先端に火の玉が現れた。

プチトマトくらいのかわいい炎がだ。  
すかさず観衆は歓声を上げる。

そして手品師楽しそうには杖を動かす。  
その動きに連動するように、プチ炎も空中を飛び回り始めた。

「……………」  
歓声飛び交う群衆の中、神宮は黙って手品師の動きを見つめてい  
るだけだ。

「uhosncuicnissx . ojizndcissijnji .」  
手品師は景気よく叫んだ後、杖をびしっと振り切った。

すると空中を縦横無尽に飛び回っていたプチ炎が、空中3メー  
トルくらいの高さで制止した。

「……………パイロキネシスか？」  
と呟く神宮だったが、実のところ本心では違うことを考えていた。  
超能力でも手品でもないある事象を。

「kuyzxhcnlizusmcliszotlyez」  
再び杖を振るいながら、手品師が何かを唱える。  
するとプチ炎がバスケットボールくらいの大きさになった。

「ucnilsdmycoisun」  
観衆が歓声を上げる中、手品師はさらに杖を振るう。

「こりゃすごいところに来たかも」  
神宮がそう呟くと、計っていたかのように元プチ炎が空に向かっ  
て飛んでいった。

そして手品師が「idcjoir!」と大きな声を出すと、元プ  
チ炎は花火のように弾けた。

夜の空に映えてかなり幻想的だった。

「uiyno inly!」

手品師はまだ何かをするつもりらしいが、もう十分だ。

神宮はそう結論づけて群衆の中心から抜け出して再び大通りを目指す。

この世界のことは大体わかった。

貨幣制度があり、目があった人と殺し合いをおっぱじめるような世紀末でもない。

食べ物もあれば飲み水だってあるし、息が出来るということはある。素だってある。

そして、

「魔法、か」

この世界には、魔法が存在する。



百聞は一見にしかずとはよく言ったものだ(後書き)

というわけで二話です。

手品師なんか喋ってる」「」の中はキーボードを適当に打っただけです。

だから解読方法なんてないのであしからず。

評価など、よろしく願います。

後は野となれ山となれの覚悟で生きればそれなりの人生を送れるはず

「さすがに腹減ったなあ」

広場を出て、道なりに大通りを進むこと約一時間。

元々大会の勝負でお腹が減っていたのに加えて、露店から香るおいしそうな匂いというダブルパンチの条件によって、お腹がエマー  
ジエンシーと叫んでいた。

「お金もないけど、店を襲うってわけにもいかないしなあ」

おそらく露店を襲撃すればお金と食べ物が入るはずだが、それは最終手段だ。

PKを使えば魔法使いであろうと一瞬でねじ伏せる自信があるが、今後のことを考えるとその手は取りにくい。

なにより、この世界の人々の日常を壊したくない。

「どうやったら外に出られるんだろうな」

よって野に出て木の実などを採取するプランに決定。

「まっ、人の波に乗ってけばたぶん外に出られるはずだ」

という行動指針に決定したので、その案を実行に移す。

人の波を正確に読み取り、その波に乗る。

しかし、歩き始めて少し経ってから、人知れずぼそりと呟く。

「何か、人の層が変わったような気がする」

さっきまでは質素な服を着ていた人が多かつたはずなのだが、今神宮の周りを歩いているのは、豪華な衣装に身を包んだ人達であった。

馬車なんかも混じってきた。

ちよびひげのおっさんなんかもいる。

「もしかして、パーティーなんかあったりして。うまい食べ物がわんさかありそう」

神宮の頭は異常なほど切れるし、勘も良い。

なのでたぶんあっているはずだ。

だがパーティーが行われるとわかったところでどうにかなるとい  
うのか？

本人は、どうにかする気満々であった。

詰まるところパーティーに紛れ込んで食べ物を頂こうって腹だ。

「まずは会場に入らなきゃだな。たぶんあの大きな建物で行うんだ  
ろ」

神宮の視線の先には、かなり大きい建物がライトアップされなが  
ら鎮座していた。

その中に入っていく人達も確認することが出来た。

ただ、その会場に入るには一度警備のチェックを受けなければな  
らないようだ。

唯一の入り口の場所に、詰め所のような建物があるのを確認した。  
元の世界の空港なんかで見られる入国審査のような感じだ。

「入り口はあそこだけっぽいし、どうしよう」

もし招待制で招待状なんかを提示しなくてはならなかったら、一  
発でアウトである。

それに言語が通じなくてもアウトのはずだ。

よって欠陥だらけの突入になるのだが、当の本人である神宮は全  
くと言っていいほど冷静だった。

「俺には身振り手振りがあるさ」

神宮の突破イメージを列挙するところなる。

ステップ一 自分を指さす。

ステップ二 それから会場を指さす。

ステップ三 お願いのポーズを取る。

以上簡単お手軽スリーステップだ。

これで本気で突破できると思っている。

さつきは神宮のことをただ褒めだったが、訂正を加えた方が良好  
かもしれない。

頭の良い馬鹿、今度からはそう呼称したいと思う。

「udn・sizcm」

とつとつ神宮の番が来た。

門番の人が手招きをしているし、前に人がいなくなったのでそんなのであろう。

なので意気揚々に門番の方へと歩みを進める。

「inyhcxnlloini?」

門番が何かを聞いてきた。

言葉の語尾から疑問型であるということだけは理解した。

しかしまあ内容がわからなければ大して意味はないのだが。

「えーと、俺、あの会場に、入りたいんだけど」

一応喋りながら、先ほどイメージした行動をとる。

するとなんと言うことが。

門番がうんうん頷いたではないか。

「え？ 嘘。本当に通じた？」

と、思ったがどうやら違うようだ。

門番は一旦身を屈めて、神宮の視界から消えた。

足下の辺りで何かを探しているように思える。

そしてやっぱり神宮の推測は当たっていて、門番は手に何かを携

えて再び神宮の前に現れた。

おそらく現在手に持っている物を探していたのだろう。

やがて門番は、ソレを神宮の目の前にコンと置いた。

「水、か？」

門番が置いたのは、水のような透明な液体が入ったガラス容器だった。

八十三リットルくらいの量で、一瞬で飲み干せそうな量だ。

「ilncni」

そして門番は何かを飲むジェスチャーをした。

これすなわち、神宮にこの飲み物を飲めと言っているのだろう。

神宮もそのことは理解していた。

しかしすんなり「はいそうですか」と言っていないものなのだろうか。

飲んだ瞬間「ぐええ」とかいうエンドにはならないだろうか？

そんな事を考えたが、そんな考えは一瞬で霧散した。

「それじゃあ飲みます」

これこそ一瞬で考えられることだが、こんなところで毒を「はいどーぞ」差し出すものか。

いくら何でもそんな事は、

「ぐええ」

ない。

「苦っ！ 何これすんげえ苦い」

遅効性の毒という可能性を破棄すれば、今し方神宮が嗜んだのは毒でなかったと言うことになる。

では神宮が飲んだのは何だったのか。

さすがに頭の良い馬鹿でもわからない。

うんうん脳内で唸っていると、その答えを門番さんが教えてくれた。

「効いてきましたか？ 私の言っていることがわかりますか」

「あっ、はい。わかります」

門番が言っている言葉も、今飲んだのが何なのかも全部わかった。今神宮が飲んだのは、言語を共通化させる効果のある水だったよ。うだ。

おそらく魔法かなんかで創ったのだろう。

神宮が翻訳水を飲んだことによって、相手の言っていることがわかる。

そしておそらく相手もすでに翻訳水を飲んでいるだろうから神宮の言っていることがわかるのだろう。

そしてそれだけでまだわかる事がある。

こんな翻訳水を創る位なのだから、この世界の規模は結構でかいということになる。

もし世界の大きさが日本と同じくらいの極小スケールだったら、言語は一種類でそれがワールドスタンダードになっているはずだか

らだ。

逆に、言語がたくさん存在するということは、世界が大きいという事が推測される。

以上のことを「あっ、はい」と言っている間に考えついたのだった。

「よろしい。それでは、招待状の提示をお願いします」

どくん、と心臓が波打った。

ここにきて最悪の予想がヒットしてしまった。

並の人間ならここで慌ててしまうのだろうが、神宮は冷静を貫き通した。

「いやその、パーティーの参加者ではないのですけれど」

「それではなぜこの会場へ？」

だんだんと警備員の言葉に力が込められてきた。

おそらく神宮の事を危険視してきているからだろう。

そのことを察知した神宮はさっさと言葉を続ける。

しかし、冷静な態度に見合わないが、賭を行うことにした。

もしミスだったら、戦闘沙汰になること間違い無しだ。

「すみません。自分は今日この会場でウェイターをやることになっているのですが、遅れてしまってます」

言いながら軽く頭を下げる。

もし今回のパーティーにウェイターが必要無いたら。

ウェイターが必要だったとしてもここで点呼を終了させていたとしたら。

そんな懸案事項もあったのだが、咄嗟に出たのは今の台詞だった。

「ああ、そういうことか。まあ仕方無いから通ってもいいだろう」

しかし心配とは裏腹にあっさりこの理由は通った。

たぶん地球だったら絶対通じないだろうなあ、と思いつながらニコッと笑う。

「すみません」

「ああ、いいよいいよ。ところで君はどこ出身なんだ？ 翻訳水が

普及していない所となると、東の方か？」

それと警備員の口調はずいぶんと砕けてきた。

神宮が偉い人でないとわかったからだろう。

「そうなんですよ。自分も翻訳水を飲みたかったんですがなかなか手に入らなかつたものでして。この場で飲ませて頂いて本当に助かりました。帰ったらみんなに自慢してやりたいと思います」

「まっ、どうせ東の方にもすぐに普及するだろうさ。翻訳水も安くなったからな」

「それは残念。すこしの間しか良い顔できないんですか」

「そういうことだな。ともかく早く会場に行け。エルマ様の誕生会のウェイターをやるなんて名譽な事なんだぞ。粗相のないようにな」

「……そうですね。気をつけます」

神宮はそう言い残して検問所を後にして会場へ向けて歩き出した。翻訳水を飲めただけでもここに来た価値は十分にあつたが、ここはついでとして食べ物もちよいと分けて貰おう。

と思つた神宮だったが、ある事に気付き足を止める。

そして辺りに視線を走らせた。

「……さすがに、浮くな」

辺りにいる人達は豪華な服に身を包んでいる。

対して自分は動きやすい黒の半袖にグレーのスウェット。下はどこで買ったかも忘れたウィンドブレーカーのズボンだ。

大通りの方ではギリギリ浮いていなかったかもしれないが、ここではかなり浮く。

こんな状態で食べ物にがつついていたら警備員につまみ出されてしまう可能性大だ。

「……仕方無い。ここは一つ、名譽なことをするとするか」

小さく溜息をついてから、再び歩き出す。

見ず知らずのエルマという人物の誕生パーティーに、ウェイターとして貢献するために。

ついでに……食事のおこぼれも狙つてるけど。

後は野となれ山となれの覚悟で生きればそれなりの人生を送れるはず（後書き）

三話です。

やっとお話が動いたような気がします。

次にヒロインが出ると思うので、これからもよろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0115ba/>

---

PK使いと魔法使い

2012年1月3日04時48分発行